

TRPGプレイヤーはヒーローになりて

世桜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

作者が思い立ったために書かれた作品。

様々なTRPGと僕のヒーローアカデミアのクロスオーバーになっておりますが、戦闘もTRPG的表現もありません。ただのTRPG勢がヒロアカ世界に渡ったらの日常を

描いたものです。

期待はしないでください。

目次

TRPGプレイヤーはヒーローになりて	1
TRPGプレイヤーは雄英生になりて	10
TRPGプレイヤーは○○○になりて	19
TRPGプレイヤーは探偵になりて	31
TRPGプレイヤーはヴィランになりて	42

TRPGプレイヤーはヒーローになりて

「……中国にて光る赤子が発見されてはや数十年。英雄は跡継ぎを見極め、緑色の少年は憧れに出会った。世界が動くか」

夜天光の差し込む部屋の中、1人の少女が手もつグラスを傾けながらそう呟いた。

「君はどうする」

「そうツスねえ……、コソコソ隠れながら駆け回るツスよ」

少女の背後から声が響いた。その声に驚く様子もなく、少女は言葉を発した。

「そうか、なら1つ依頼を頼もうか」

「依頼ツスか？」

何かあつたかなという声とともに紙をめくる音が聞こえた。

「今朝入れられた新しい依頼だからな。君の手帳にはないと思うぞ」

「入れたてホヤホヤってわけツスね。内容はなんスか？」

「ヴィラン：ロウきゅーぶの『居所』を抜いてきてくれ」

「……またツスか？」

「……またなんだ」

ハア。というため息が2人の口から溢れた。

ヴィラン：ロウきゅーぶ。バスケをする女子小学生の元へ唐突に現れてはコーチをして「まったく、小学生はサイコーだぜ!!」というセリフを残し消えていくヴィランだ。……ちなみに、ロウきゅーぶがヴィラン認定されている訳というのが、個性の無断使用なのだが、それよりも不法侵入の方を多くやりすぎてヒーローよりも警察のお世話になる方が正しい人物だったりするのは完全な余談であろう。

彼女らはいいつの搜索依頼を5度はやっているため、飽き飽きしていた。

「……まあ、出された以上はやるツスよ」

「よろしく頼むよ」

少女はそう言つて背後の青年へどこからか取り出した資料を渡す。

「詳細はその資料を見てくれ」

「了解ッス。……にしても、今回も酷いッスねえ」

彼は改めて視線をこの部屋へと向けた。そこら中に赤いシミが出来ており、赤に染った服を着た数十名の男たちが床に横たわっていた。

「……コイツら、生きてるんスカ？」

「生きてるよ。『ワーディング』で気絶させてから薬品でちよいとやっただけだからな」

「じゃあ、床や壁に付いてる血は全部……」

「私のだ。銃が効かないのを知った時の顔は良かったよ」

「えぐい事するッスねえ……」

個性持ちがいたせいで一回『リザレクト』したがな。少女はそう言って笑った。その笑みは見るものを惹き込む、妖艶さがあった。

「上の階の調査、終わったわよ。……あら、もう来てたのね『シノビガミ』」

部屋の扉をコンコンと叩きながら誰かが2人に声をかけた。

「お疲れッス『C o C』」
コール・オブ・クトゥルフ

『シノビガミ』と呼ばれた青年が扉を叩いた彼に声をかける。

「やはり現場調査は君に任せるのが一番だな。私にそんな器用なこと出来ないからな」

「そんなこと言ってどうするの。適材適所よ、適材適所。調査は出来るけども、戦うことは出来ないんだから私は」

「……ショットガンキックをぶち込む人間に言われたくないッスね」

「余計なことを言うのはこのお口かしらあ？」

『シノビガミ』の言葉に、『C o C』は余計なことを言った彼の頬を5割程度の力で引っ張った。

「ヒタタタター！ひはい！ひはいッス!!」

「今度余計なこと言ったら口を縫い合わずぞ」

「ウッス……」

頬をさする『シノビガミ』を見て、『C o C』は咳払いをした後、少女の方へ体を向けた。

「調査の結果、良いニュースと悪いニュースがあるの。……どつちか

「ら聞きたい?」

「ふむ、悪いニュースから頼もうか」

「了解リーダー。……実験体の子たちだけど、殆どが亡くなってたわ」
「殆どってことは、何人かは生きてるんすか?」

「ええ、肉体的にはね」

「……精神が死んだ、ということか」

「その通りよ」

『COC』の言葉に、『シノビガミ』は拳を強く握った。ポタポタと、彼の手から血が零れていた。

「それで、良いニュースというのは?」

「1人だけ、完全に生きてる子がいたわ」

「ほんとツスか!?!」

「ええ。さ、いらつしやい」

『COC』がそう呼ぶと、入口の奥から1人の少年が現れた。青色の服を着た彼はすぐに『COC』の後ろへ隠れてしまった。

「ほら、大丈夫よ。さつき話したでしょ? 私の仲間たちよ」

自己紹介して? 『COC』の言葉に少年はゆっくりとだが前に出て、

「……幻之げんの 怪かい」

そう名乗った。

「怪くんツスか。自分は忍上にんじょう 調しらべっていうツス。ヒーロー名は『シノビガミ』ツスけど、聞いたことあるツスか?」

幻之は小さくクビを横に振った。

「そうツスか……」

「私は龍本たつもと 都築つづきだ。よろしく、幻之」

龍本はそう言い、幻之へ向けて手を差し出した。幻之はその手を取り、

「こちらこそよろしくお願いします。こんな地獄から助けてくれた貴方のために私は全てを捧げます。あ、靴舐めます? てか舐めさせてください。あ、こちら死んでた職員から盗んだお金です。ざっと10万はあると思うのでお納め下さい」

そう饒舌に語った。

「……………はい？」」

3人の口から変な声が出た。

「え、ちょ、どういうことツスか？」

「え、や、私に言われてもねえ……………」

「……………これは酷い」

「さすがにそれは酷くないですか？私はコレでここまで生き残ってきたんですが……………」

3人が幻之の行動に頭を抱えていると、倒れた男の中から1人が勢いよく立ち上がった。

「死ね化け物オオオオ!!」

いきなりの事であったため、『シノビガミ』も、『COC』も、龍本ですら反応ができなかった。しかし、たった1人だけその動きに反応できた人物がいた。

「僕の恩人に何してくしようとしてんだ？」

カチャリ。という音と共に幻之がおもちやのような見た目をした何かを男の額に当てていた。

「ZAPZAPZAP!レッドのゴミイ!!」

その何かから放たれたレーザーは男を文字通り消滅させた。

「やっぱり、レーザーガンなのねそれ」

「……………もしかして、あれツスカね」

「……………なるほど」

「ふう、怪我は無いですか恩人様。大丈夫です、貴方の反逆者と共産主義のクズは全て私が削除します」

「幻之、お前『パラノイア』か？」

「……………はい。その通りです」

その言葉を聞き、龍本は笑い出した。そんな龍本を見て幻之はほんの少しだけ引いた。

「ん……………、ああすまない。同士が見つかったことが嬉しくて、ついな」

「同士、ですか？」

「ああ、ある力を宿した者たちの事だ。私がこの世界に来てからというもの、現れ始めてな」

中身のなくなったグラスを砂に変えながら龍本は語る。

「既に気付いていると思うが、お前を保護したそのオカマ……いや、オネエか。オネエは『クトウルフ神話TRPG』の全てをその身に宿している。忍上は『シノビガミTRPG』だ。そしてこの私は『ダブルクロスThe 3rd Edition』だ」

「……すごく、無双出来そうな内容ですね」

「いや案外そういう訳でもない。私たちは皆、『キャラクター』を作り出してそれを使っているだけだ。キャラのいない私たちなど所詮一般人に毛が生えた様なものよ」

今だってカリスマ幼女キャラのロールプレイをしているに過ぎないからな、私は。龍本がそう言い、忍上は無言で頷いた。

「……さて、仕事も終わりだ。『シノビガミ』は警察に連絡を、『COCC』は幻之を連れて先に事務所へ戻ってくれ。私はコイツらを縛る」

「了解ッス、リーダー」

「分かったわ、リーダー。ほら、行くわよ」

龍本の言葉に2人は動き始めた。その姿を確認し、龍本も黒服の男たちを縛る為の縄を壁から作り出し、縛り始めた。

「リーダー、警察は10分ぐらいで来れるそうッス」

「そうか、分かった。……終わつたのならお前も縛るのを手伝え」
「うッス」

「……誰が亀甲縛りにしろと言った」

「自分のゴーストッス」

「……もういい、勝手にしてくれ」

そんなことをしながら2人は警察が来るのを待った。ちなみに、その亀甲縛りをした男の髪型を昇天ペガサスMIX盛りにして遊んでいた忍上がお仕置きとして天井から吊るし上げられて龍本に叩かれていたのを宣言通り10分後に到着した警察が発見したのは完全な余談である。



「もう朝か。……いま何時だ？」

「いまは……午前の6時半ツスね」

「……………先に行くぞ！さすがに遅刻はしたくないからな！」

「学生は大変ツスねえ……。わざわざ教職免許を取るために大学入学するからツスよ」

「うるさいぞ！ええい、暇なら私を抱えて帰れ！」

「…………『ディメンジョンゲート』の存在、忘れてないツスカ？」

忍上の言葉に、龍本はピタリと動きを止めた。そのまま、頭だけを壊れたブリキ人形のように忍上へとゆっくり向けた。

「…………忘れてたツスね」

「い、今のは君を試してたんだけ！忘れてた訳じゃないぞ!？」

「ハイハイ、分かってるツスよ」

「本当だろうか!？」

ちなみに、この光景は仕事が朝まで続いた場合によく見られる光景だったりする。幼女が大人の男に突っかかっていたため、早朝ランナーから「ホッコリした」「孫や娘の小さい頃を思い出した」等の手紙が事務所によく届く。龍本は「誠に遺憾である」とのコメントを残している。

「にしても、遅刻1つでそこまで騒ぐツスカ？」

「内定が決まってるからな。就職先に自分をよく見せたいんだ」

「…………雄英高校ツスよね」

2人はそんなことを言い合いながら『ディメンジョンゲート』を開いて帰ってきた。そんな2人を1人の少女が迎えた。

「おかえりなさい、リーダーさんに忍上さん」

「ああ、ただいまリヤナ」

「ただいまツス。…………リヤナちゃんはリーダーが担任の先生になったらどう思うツスカ？」

「え？えーと…………」

チラリと龍本の顔色を伺ったりリヤナだったが、

「ハイハイハイ、パワハラはいけませんよ〜ってな」

若い男の声がそんなことを言っただけで刺青にまみれた手でリヤナの口

を塞いだ。

「保護者様の登場ツスか。こりやちよつかいもかけられないツスねえ……」

「オイオイオイ、誰が保護者だよ誰が。マスターを守るのはサーヴァントとして当然だろ？」

手だけではない。顔面すらも覆う大量の刺青を入れた青年がニシシと笑いながら答えた。

「どの口が言うツスか。人殺しに特化した英霊。アヴェンジャー『アンリマユ』」

「……ホント、アンタ達相手にしてるとサーヴァントとしての自信無くすよな。なんで名前知ってんだよ」

やれやれといった風に彼、アヴェンジャーはリヤナの口から手を離しながら肩を竦めた。

「……喧嘩もいいが、まずは食事にしないか？」

睨む忍上とそれをニヤニヤしながら見つめ返すアヴェンジャーの間に割って入りながら龍本が言った。

「……そうツスね。リヤナちゃん、朝ごはんのメニューはなにツスカ？」

「パン派の人はシャキシヤキレタスのサンドウィッチと卵サラダのサンドウィッチ。ご飯派の人は目玉焼きだよ」

「了解ツス。手、洗ってくるツス」↑パン派のシノビ

「うむ、今日も美味しそうなメニューだ。私も洗ってくるでしょう」↑ご飯派のオーヴァード

「納豆あるか？」↑まず食べなくていい復讐者

「食べたいなら配膳は手伝って？」↑食べなきゃ魔力足りないマスター

「任せな」

その後手を洗ってきた2人と共に食事をするが、アヴェンジャーが納豆を食パンにぶっかけ、ピザチーズを乗せてトースターで焼くといういわゆる納豆トーストを作り出した。忍上以外の2人からは高評価だったらしい。



「そろそろ私は大学に行ってくださいませね」

食事の後、能力を解除し赤髪赤目の高圧型ロリっ子から黒髪黒目のふんわり髪森ガール系ロリっ子へ戻った龍本がそう切り出した。

「なら私も学校に行ってくださいませ」

それに合わせるようリヤナも口を開いた。

「気を付けるツスよ、二人とも。リヤナちゃんは特に狙われやすいツスし、リーダーも『なりきってない』とただの女の子ツスから」

「忍上さんはまだ解除しないんですか？」

「アンタが新しい仕事を渡してきたこと忘れたツスか？」

「……ゴメンなさい」

ペロリと舌を出しながら龍本は謝った。

「仕事ツスから、仕方ないツスよ」

ほら、遅刻する前にさっさと行くツスよ。忍上の言葉に2人は龍本の腕に巻かれている時計を確認し、事務所から飛び出した。

「怪我しないように気を付けるツスよー……さあて、と」

チラリと台所のシンクに積まれた大量の皿とソファにて眠る『C0 C』と彼に抱きつきながら眠る幻之をみて、

「まずは洗い物からツスかねえ……。そのあとは洗濯ツスか」

そうつぶやいた。



大学を終え、そこから辺で時間を潰してリヤナを迎えに行つたあと『ディメンジョンゲート』で事務所に帰つた龍本は自室に引つ込み、1冊のノートを取り出した。

ノートのタイトルは『個性研究』。彼女がこの世界に来てからずっと行っているものである。

その中には彼女が辿り着いたこの世界における個性の正体とそれ

に付随する考察が書かれたいた。

『個性とは、レネゲイドウィルスが変質したものであり、個性を当たり前に使う今の人々はレネゲイドウィルスに完全適応した新たな人類ではないのか。ヒーローをダブルクロスの目線で語るとしたらUGNに当たるとのだろう。そしてヴィランはおそらくジャーム。』

私が思うに、個性持ちの人間は個性を使う度にバックドラフトをしているのではないか。しかし、ヴィランはその機能が無く、個性を使う度に侵食値が上がってしまい100%をこえてジャーム化……つまりはヴィラン化してるのではないか。

ひとつ思うに、雄英主人公クラスの爆豪勝己や轟焦凍はサラマンダー、上鳴電気はブラックドックに当たるとのだろう。八百万百はモルフエウスか。蛙吹梅雨や障子目蔵、尾白猿尾はキュマイラに入る。芦戸三奈と葉隠透も一応キュマイラか。キュマイラ多すぎないか？峰田実正直よく分からない。なんだアレ』

自身が書いたノートをそこまで読んで、彼女はそれを閉じた。

彼女も全ての個性と人物を覚えている訳では無い。はるか昔の記憶を頼りに（色んな意味で）覚えている個性持ちの考察を書いただけで止まっている。雄英の内定は決まっているため、このノートに残りの生徒が加わるのも時間の問題だろう。

「リーダー、飯出来たツスよー！」

「はーいー！」

いつの間にか帰っていた忍上に呼ばれ、龍本は部屋から飛び出る。

これから、彼女たち事務所『TRPG』は様々な事件に巻き込まれていくのだが、今回はココで語るのを終わるとしよう。

TRPGプレイヤーは雄英生になりて

皆さんこんにちは、リヤナスフィールです。今私はグラウンドにて身体測定の準備をしています。

元々この生徒である私は入学式に出る必要もありませんから。担任である相澤先生への点数稼ぎも込めて、私はこんなことをしているのです。

……あ、体操服に着替えた新1年生の皆さんが来たみたいです。彼らが新1年生なら私は何になるのでしょうか。旧1年生ですかね？

「お疲れ様です、相澤先生」

「ああ、そつちも準備お疲れ」

そんなアホなことを考えていたら新1年生の前にいた相澤先生が声をかけてきた。

寝袋を抱えてる事を見るに、計測は私に丸投げするつもりなのかなあ……。

「後よろしく。やり方は去年ので分かってるだろ？」

ほら、予想通りです。

「はい。いつもの通りで？」

「ああ」

相澤先生は私に計測器全般を渡すと、寝袋に入ってしまった。頭と手は出ており、すぐ横に記録用紙があるのを見るに全部投げる事はしないようではある。

「計測を任せましたリヤナスフィール・フォン・アインツベルンです。……えーと」

チラリと計測器と共に渡された名簿を見る。爆豪勝己という名前の横に『入試1位』との走り書きがされていた。

「爆豪君。中学までのボール投げはどうやってた？」

「フツーに投げてた」

「じゃあ個性を使つて投げて。その円から出なければなんでも好きにやっていいよ。思っいきりお願いね」

「んじやあ」

手渡したボールの重さを確かめるよう、手の中で転がしながら円の中へと入った爆豪君。

円の端っこに立ち、助走をつけながら思っきり投げた。

「死ネ!!」

……そのセリフはどうなのかにやー？

そんなことを考えながら、私は爆豪君の出した記録を彼らに見せる。

「己が個性の限界点を知り可能性を導き出す。これがヒーローへの第一歩だよ」

記録『801.4m』。圧倒的なその記録は彼らを湧かせた。

……原作よりも距離が上がってる。私^{イレギュラー}たちのせい、かな。

彼らのうち、誰かが放った言葉を聞き、相澤先生が寝袋を着たまま起き上がった。

「面白そう、か。これからの生活、そんな思いで過ごす気なのか？」

あ、これはアレが来ますね。

「よし、総合結果が最下位のもは見込み無しと判断し除籍処分しよう」

やっぱり。

これは去年、私が文字通り新1年生の時にやられた。その結果、1組ヒーロー科に私だけが残った。

雄英体育祭の後、本来ならば普通科の生徒などが編入してくるのだが、誰も相澤先生のお眼鏡に叶うものがいなかったのか私は1人のままだった。

二学期中はまだ学校に行っていたのだが、三学期が始まると同時に私は学校に行くことをやめた。その結果、出席日数が足らずに単位を落とした。

「んじやあまずは50m走から始めよう。アインツベルン、あとはよろしく」

「はい、分かりました。相澤先生」

そこから全員が本気の計測が始まった。ほとんど原作通りでした

けど、違う所と言えば爆豪君が緑谷君への無個性文句を言わなかった事ですね。それにしても距離が原作よりも近いような……？

「（「ハ、ハ、ハ」）ハアイ

お呼びでないから帰って。

「（「ハ、ハ、ハ」）仕方あるまい。

「（「ハ、ハ、ハ」）サラダバー

二次元は歓迎だけど三次元でしかも学友物はちよつと……。

「全ての種目が終わったから結果を発表するよ。全員一気に出すからね」

そう言つて相澤先生から受け取った記録用紙を元に算出した結果を映し出す。

原作より記録が高くなつていた緑谷君だったけど最下位は変わらなかった。

「あ、ちなみに除籍は嘘な」

「「「え……？」「」」

相澤先生の思い出したように言い放つた言葉にみんなは固まる。

「みんなの実力を引き出す合理的嘘。相澤先生は去年もやってたよ」

補足を一応いれてあげましょう。まあ、その合理的嘘に入れたのは私だけなんですけどね。

「へえー。……ん？去年を知つてゐるつてことはリヤナスフィールさんは先生なんですか？」

髪の毛がトゲトゲしい赤髪の子がそう問いかけてきた。

「違うよ、切島君。私は去年入学して進級できなかったただのバカだよ」

「……は？」

「質問は後で聞いてあげる爆豪君」

新1年生全員の前に立ち、私は

「改めて、2回目の1年生をやっておりますリヤナスフィール・フォーン・アインツベルンです。みんな、よろしくね？」

驚愕の声グラウンドに響いた。男子では緑谷君と峰田君、女子では耳郎ちゃんが驚いていた。峰田君と耳郎ちゃんは私の胸を見て、で

したが。

まあ、私の胸、と言うよりは身体自体が作り物ですけど。キャスターことパラPには頭が上がりません。

ちなみに、私は低身長の巨乳です。理由ですか？私になる前の『俺』がロリ巨乳好きだからだよ!!

みんなが落ち着いたのを見て、相澤先生は口を開いた。

「はい、静かになるまで1分もかかりました。……仕方の無いことだとは思うがな。全員教室に戻つとけ。そこでガイダンスを行う」

仕方の無いことなんですか……。

「アインツベルンが」

え、ちよ、ま

「なんで私なんですか？」

「コイツらが騒いだ原因だからだよ。あと——」

相澤先生はそう言って私から計測器を回収しながら続けた。

「——先生、少し戻るのに時間かかりそうだから全員で友好関係でも深めておけ」

言い終わり、計測器を全て回収すると先生はゆつくりと校舎に向かって歩き始めた。

「えつと……とりあえず、私たちも教室に戻ろうか？」

そんなことしか言えなかった。まさか相澤先生が友好関係を深めるとか言うなんて……。



ガイダンスという名の自己紹介が終わり、みんなが帰宅する中（もちろんガイダンスもしました）、私は相澤先生に呼び出されました。

「なんで呼ばれたのか、分かるなアインツベルン」

「……はい」

「言ってみろ」

「リーダーさんの暴走を抑えるため、ですよね」

「ああ」

「あのさあのさ！私に関節キメながらガチトーンで話しないでくr痛い痛い痛い!!!」

そうです、リーダーさんは『なりきっていない』とよく暴走するのです。やりたい事がやれなくてフラストレーションが溜まるのは分かるのですが……。

「流石に今回私悪くなくない！ただオールマイイトが敬語で話しかけてきただけじゃん!？」

「アインツベルン少女、龍本さんの言った通りだ。今回彼女は何も悪くない。悪いのは私だ」

「いえ、それではなく入学式に行ったアホな演出の事です」

入学式に出ていたミッドナイト先生の言葉から察するに、イージーエフエクトをふんだんに使った何かしらをやらかしたのでしょう。

「あ……」

「リーダーさん、覚悟はよろしいですか？」

「や、優しく……やっつてね？」

「却下!!」

ゴギイツ!という人体から出てはいけない音が休憩室に響いた。

「アフツ……」

そのまま、リーダーさんは気絶しました。オーヴァードですし、この位では死にません。死んでるなら忍上さんに何度も殺されてることにあります。

「相澤先生、リーダーさんはこの後仕事はありますか？」

「いや、特にない。今日はそのまま連れ帰ってくれ」

「分かりました。相澤先生、オールマイイト先生、さようなら」

リーダーさんを背中に背負って休憩室から出る。

ちなみに、先程殺つたのは腕なので背負うのに苦労はしません。これでも鍛えてますから、リーダーさん位は余裕ですよ。

「あ、リヤナちゃん」

校舎の外に出ると、葉隠ちゃんがいました。

「葉隠ちゃん、まだ帰ってないの？」

「うん、ちよつと校舎を見て回ってたの。……あれ？その背負ってる

人だれ?」

「先生」

「えっ?」

「ちよつと関節キメて折ったら気絶しちゃったの」

「えっ……」

「また明日ね」

「えっ、あ、うん。バイバイ」

別れの挨拶をしてその場から離れる。

それにしても、葉隠ちゃん随分と挙動不審だったなあ。どうしたんだろ。なにか信じられないものでも見たのかな?

気にしても仕方ないため、リーダーさんを背負ったまま事務所まで帰り、ベッドにリーダーさんを放り投げてから夕食の用意を始めた。

リーダーさん、『なりきってる』時はカツコイイんだけどなあ。

そんな思いも『なりきっていない』リーダーさんを見れば消えてしまいます。それくらいリーダーさんはキャラ崩壊が激しいのです。

「うっわあ、おっそろしい……」

リーダーさんの様子を見たであろうアヴェンジャーがそう呟きながらキツチンへ入ってきた。

「何?」

「少しだけ威圧感を含めてそう言うと、彼は慌てて

「いや、なんか手伝える事無いかなくてよ」

そう言った。

「ならお皿出して。おっきめの奴。リーダーさんの分もね」

『アレ』で飯食えるまで回復すんの?」

「大丈夫。ご飯の匂いがしたらやってくるから」

「……犬かよ、リーダー」

その後、匂いを嗅ぎつけたリーダーさんがリビングに飛び出して、アヴェンジャーと衝突事故を起こしたりしましたが、完全な余談でしょう。



翌日です。

眠ったまま起きないリーダーさんを昨日のように背負いながら学校へ向かっています。

ロリ巨乳制服少女がスーツ少女を背負っている姿が珍しいのか、写真を撮られたっぽいです。学校に着いたらクラスメイトに質問攻めされました。

まあ、そんなこんなで午後です。午前は先生方による普通の授業でした。リーダーさんは日本史を教えるそうです。まあ、あの人は日本史というより、人類史のが得意だと思えますが。なんせこの世界における『都築京香』の立場ですから。

午後はオールマイトによるヒーロー基礎学らしいですが、私は事務所の方である程度は叩き込まれているのですよね……。しかも基礎学ならまだ授業に出てた頃ですし。

「わーたーしーがー!!」

チャイムがなると同時に廊下から声が聞こえる。

「どうやらオールマイトが来たようです。」

「普通にドアから来た!!」

「『オールマイトキタアアア!!』」

「オマケで私も来たア!!」

「『誰?!』」

「フンツ!!」

「アボバツ!!」

「『リヤナが吹っ飛ばした?!』」

まったく、リーダーさんが紛れ込みましたね。昨日あんなにボコしたのに反省の色がありません。忍上さんに報告案件でしょうか？

ちなみに私の席は一番後ろ。出席番号は21番で八百万ちゃんの後ろ。正直黒板が見えない。リーダーさんは前のドアから出てきましたので直線距離でも遠い。しかしその程度の距離はセイバーに教えてもらった『なんちゃって縮地』と強化魔術で無いに等しい。

「あー……。アインツベルン少女、彼女は今回私のサポートとして連

れてきたんだ」

「それは失礼しました、オールマイト先生」

「わ、私には謝らないの……?」

「日々の生活に照らし合わせろ」

「アツハイ」

「じゃ、じゃあ授業を始めよう!今回はこれ、戦闘訓練!!」

私がリーダーさんから離れ、席に着くとオールマイトがほんの少しだけ声をふるわせながら手に持っていたフリップを見せてきた。そこには大きく『戦闘訓練!』と書かれていた。

「申請したヒーローコスチュームがロッカーの中にあります。今回はそれに着替えての訓練です。リヤナは去年申請したモノがあると思うのでそれを着て下さい」

「……ちゃんと出来るんだね」

「まあ、流石に教師ですから。ふざける場とそうでない場は判断できますよ。コスチュームは持ちましたか?では、案内しますので着いてきてください」

リーダーさんを先頭に、私たち1-Aは教室を後にし、グラウンド・βへと向かった。

そんなこんなで私たちはみな、コスチュームに着替えてグラウンド・βに集合していた。ちなみに、私のコスチュームは『天の衣』のカラーリングに黒を加えたものとなっている。

いやまあ、『黒桜』でも良かったんですけどね?嘘だとしてもインツベルンを名乗ってる以上、この服装しかないと思ってしまう……。あ、胸当てはちゃんとしています。そこまで変態ではないです。

「始めようか有精卵ども!!」

「戦闘訓練の時間だ!!」

2人による授業開始の号令後、オールマイトから説明を受けてみんな『は』クジを引いてチーム決めをしました。

「……で、なんで私はクジ引けないのですか?」

「アインツベルン少女は『去年』という経験があるからね。もしかしたら君のワンサイドゲームになる可能性がある」と龍本先生から注意を

受けたのさ」

……まあ、納得です。確かに爆豪君と轟君がチームワーク発揮して来ない限りは負けることも無いと思いますし。

「その分の埋め合わせはあるから。今はゆっくり友達の勇姿でも見てよ」

リーダーさんに言われ、その場に座り込んでモニターを見る。そこには屋内にて準備を進めるヴィランサイドの爆豪君、飯田君チームと屋外にて作戦会議をするヒーローサイドの緑谷君、麗日ちゃんが映っていた。

爆豪君と緑谷君の関係が原作よりも良いみたいだから、原作のような暴走はしないのだろうか？

そんなことを考えながら、私は意識をモニターへと移していった。

TRPGプレイヤーは〇〇〇になりて

皆さん、こんにちはツス。忍上ツス。自分は今、公園でヴィラン『ロウキューブ』の『居所』を突き止めたところツスよ。

「やつと見つけたツスよ……」

「そうね、もうやりたくないわ……」

自分の横では『COC』が椅子に座り込んでいた。ヴィランの『居所』を突き止める時は『COC』が足を使って出現頻度の高い場所の当たりを付け、自分が本人と接触し、『内偵』で抜き取るという必勝コンボがある。

まあ、このやり方は『COC』にとてつもない負荷がかかるツスから、あまり使いたくはないんすよねえ……。

「……またあんた達か。何の用だ？」

六度目になるからか、『ロウキューブ』もウンザリとした雰囲気を出しながらそう問いかけてきた。

「変わらないツスよ。ヴィランに個性を利用されないよう保護を受けて欲しいだけツス」

「ヴィランである俺に言うことじゃあないな、その言葉」

「そんだけ国はアンタの個性『絶対教師』ティーチングマスターを重要視してんのよ。悪用されたら溜まったものじゃないわ。そもそも冤罪みたいなものでしょ、アンタは」

自分の言葉に『COC』が続いた。

『ロウキューブ』のもつ個性は軽視されがちだが実際はとてつもない力を持っている。

過去に、彼が1人の少年へ算数を教えたことがあった。その少年は現在、中学生でありながら数学に関しては学者顔負けの頭脳をもつ天才児となっていた。

圧倒的な速さで知識を与えていく『ロウキューブ』の個性は知的障害者などのデイスアドバンテージを抱えている人間や動物に対しても効果を持つ。

知的障害者に対して個性を使い様々なことを教えればその人間は

一般人よりもほんの少し頭の良い人間へとなり知的障害というディスプレイアドバンテージを消すことが出来る。

また、動物にこの個性を使えば雄英高校の根津校長とまでは行かないものの、一般的な人間を超える頭脳を手にすることが出来る。

「今となつては嘘から出た実だがな。それに、俺は何処かに縛られる気なんてない」

「ならせめて何処かに定住してくれないツスか？住所不定を探すのが面倒で……」

シノビガミのシステム的に言うならば、彼の『秘密』によって『居所』が1回限りの限定情報となつている様なものだろうか。1度誰かが彼に戦闘を仕掛ければ、彼とまた戦闘を起こすためにはまた『居所』を調べなければならぬ。

「やりたいように生きる。そんなことをする気もない」

「ならウチの事務所に手紙を出してくれるだけでいいわよ。今あなたがどこに居るのかさえ分かれば、ヒーロー側も縛る気ないわ」

最終手段として事務所で話し合った内容が『COC』から伝えられた。

ヒーローとしても彼の個性が悪用されるのを防ぎたいだけで、彼を捕まえる気はない。

そもそも彼がヴィランとして数えられているのは一般人がその個性を求めて近づかないようにするための緊急措置だ。これに関しては本人からの許可もある。

「……つまり、活動拠点を移動する度に現住所を連絡すればいいという事か？」

「そういうことツスね。居場所さえ分かればたとえ攫われたりしても簡単に見つけ出すことが出来るツスから」

「なるほど。こうやって何度も追われるよりは一報を入れるだけの方がマシか。……メールでもいいのか？」

「全然いいわよ」

「じゃあ交換するか。赤外線でもいいよな」

「悪いけど、私のスマホ赤外線無いのよね」

「めんどくさいな……。ほら、これが俺の連絡先だ」

目の前で行われている連絡先の交換を見て、『ロウキユーぶ』を説得する一連の仕事が終わるのだと思うと自然と息が漏れた。

「ほら、お前も携帯をかせ。連絡先の登録するから」

「あ、どうぞッス」

ロックを解除し、『ロウキユーぶ』へ携帯を渡すと彼は不慣れな様子で携帯を操作し始めた。

「……同じ事務所なのに連絡先の量がここまで違うのか。それに、ガラケーとはな」

「よけーなお世話ッス。自分は情報屋。連絡先が少ないのも、ガラケーを使ってるのも情報を漏らさないための対策みたいなもんスカラ」

「いや、だからと言って……いや、何も言うまい」

言いよどみながら返された自身の連絡先には五人目の人物おとして『おしえ教育』という名前が登録されていた。

「それじゃあ、お疲れッス。自分たちは事務所に帰るので」

「ああ、もう会うことは無いかもな」

五回も追っていた相手だからか、会わないとなると少しだけ寂しい気持ちがあった。だが毎月の仕事の一つ減ることを考えるとそんな気持ちも吹き飛んだ。

「もう女子小学生にバスケ教えるなんてことしちゃダメよ？」

「……あれはそっちがヴィラン認定を出すために仕方なくやった事だが？」

「その割にはノリノリだったスけど」

「幼女に少女、童女は女神だぞ。女神たちが頑張ってるのならば手助けをするのは当たり前だろう！私が仕方なくやったのは不法侵入だ！」

本日一番の大声である。

「……もう通報した方がいいんじゃないかしら？」

警察組織は無能。悪いことだけは早いから個人として協力してくれる人以外は信用出来ないと結構前にボヤいていた『COC』がここ

まで言うとなると相当なのだろう。

「あのねえ、確かにちっちゃい子は可愛いわよ。でも女神って無いでしょ。アンタもしかしてロリコン?」

「ロリコン? ありがとう、最高の褒め言葉だ」

「もうダメねコレ」

「精神分析は効かないツスか?」

「無理よ。コレがコイツにとつての普通なんだから」

「どうやらお前らは女神の素晴らしさ全然分かってないみたいだな。教えてやる! こつちに来い!!」

『ロウきゅーぶ』は自分と『C○C』の腕を思いつきり掴んだ。

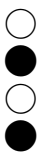
「ちよつと、離しなさい!!」

「女神の素晴らしさを理解するまで帰さん! 安心しろ。今回は五時間で済ませてやる」

五時間というワードに自分たちは絶望し、死んだ目をしながら彼に無言で行った。

ちなみにこの後『C○C』が暴走を起こし、一時的狂気『ロウきゅーぶ』にリーダーの写真を見せながら可愛さを語り合った。

「……頭痛が、痛いツス」



『シノビガミ』に『C○C』、よくやった」

『C○C』のせいで五時間を超えた布教から解放された自分たちは事の顛末をリーダーへ報告をしていた。

『ロウきゅーぶ』の住所を特定するだけでなく、彼の連絡先を手に入れたことは予想外だがな。……でだ、アレを止めてくれないか?」

「良いぞ。凄くいいぞ龍本ちゃん!」

リーダーの指差す先には一眼レフを構えた『ロウきゅーぶ』の姿があった。カメラからカシャカシャと音がするが気にしてはいけない。

「り、リーダー。事務所を彼を保護できれば楽じゃない?」

「そ、そうツスよ」

「…………ふむ」

リーダーはそうやって手をあごに当てる。

「幻之、闕下侵入」

頭痛がしたかと思うと、自分と『C○C』の腕に幻之くんが指を当てていた。

あー、闕下侵入はまずいツス。こりや『C○C』死んだツスね。

「…………なるほど。九頭龍は夕食抜きだ」

幻之くんから耳打ちされた内容を聞き、リーダーは『C○C』へ罰を下した。

「それと、忍上」

「はいツス」

「次の「そのキリツとした表情イイネエ！」仕事を頼みたい。詳細はこち」でも写真の可愛い笑顔も見たいかなーなんて」らの…………」

リーダーの言葉を遮る『ロウきゅーぶ』。テンションが爆上がりしているせいなのか、その事実気付いていない。リーダーは静かにだが頭に青筋を立てていた。

椅子から立ち上がり、『テイメンジョンゲート』で『ロウきゅーぶ』の後ろにワープして彼を蹴り倒した。

「ゲファア!？」

一回転、二回転、三回転、ダメ押し of 半回転。そのまま壁に背中を叩きつけられた彼は吐き出しでは行けないようなモノをはきだしながら床に落ちた。

「少し黙るように、教育してやろうか?」

倒れる『ロウきゅーぶ』の腹に足を勢いよく下ろし、リーダーは抑えていた『ダブルクロス』としてのカリスマを少しだけ解放した。

「……………」

「どうした?先程のように口が回っていないが。アレはただの演技という訳か?」

「……………ろか」

「ん、なんだ?」

「……………白か」

発言者である『ロウきゅーぶ』以外のここにいる全員が、彼が何を言っているのか理解出来なかった。

「しかもカボチャ。分かってるじゃないか」

その一言で、全員が言わんとすることを理解した。

リーダーは『ロウきゅーぶ』の視線を追い、顔を真っ赤に染めた。

自分はこれから起こるであろう惨状を思い、幻之を連れて部屋から脱出した。

『COC』も自分と同じように脱出し、タオルを取りに風呂場へと向かった。

「このヘンタイ!!ロリコン!!死んじやえ!!」

「ありがとうございます!ありがとうございます!!」

扉の向こう側から聞きたくない声が聞こえる。

「あんなのが、今まで自分たちを翻弄してきたヴィランツスか……」

今まであんな奴に振り回されていた自分が恥ずかしいツス。

「リーダー様は長い間生きてきたのに、なんであんな反応してるのですか?」

「ん?ああ、幻之くんは初めて見るツスか?」

「はい」

「リーダーはあんな見た目ツスから、彼氏がいた事なんてないんす。しかも人間からしてみたら姿の変わらないリーダーは神みたいなものとして扱われたツス。んで、神にされていたとき目の前でR-18指定なことをされたらしいツス」

「R-18指定って言いますと……」

「ぶっちゃけるとS○Xツスね。性的に恥ずかしいことをされると当時のことが思い起こされて生娘になるツス。こつちに来る前が中学生だったらしく、まだ性教育してなかったらしいツスからねえ……」

「どうにか『COC』と自分で教育したんすよ」

あの時は酷かった。

「どうにか自分へ向かないものは平気レベルまで持っていくのに1年かかるとは思わないツスよ……」

「……お疲れ様でした忍上さん」

「ありがてえツス……」



「さて、仕事の話をしよう」

部屋の中から声が聞こえなくなると自分はリーダーに呼び戻され、仕事の話をはじめた。

「リ、リーダー。あの端っこにあるモザイク必須な塊は……」

「気にするな」

「アツハイ」

なんかビクンビクン動いてるツスが、突っ込むのはやめた方がいいツスね……。『深淵をのぞく時、深淵もまたこちらをのぞいているのだ』っていう『COC』がいつも言ってるやつツス。

「今度の仕事は二つ頼みたい」

「二つツスか」

「二つは『ガンタガン』の調査だ。出来上がった資料はそのまま警察へ持って行ってくれ」

「了解ツス。……いい加減、ラノベタイトルとか曲名とか二次キャラの名前をあだ名にするの止めるツスよ」

「分かりやすいから、仕方ないだろう。それにこれは元々こう名付けられている」

確かに。リーダーの個性翻訳オタクVer. は前世がオタクだった『TRPG』のメンバーにとってはとてもわかりやすい。

例えば、自分が初めて活躍した時のヴィランをリーダーは『先代巫女』と名付けた。彼女は自身の肉体を強化する個性を持っており、『東方Project』を知っていたメンバーは彼女の個性を一瞬で理解することが出来た。

「名前から察するに、『血を弾丸にして射出する』個性ツスか？」

「その通りだ」

「調査だけで、いいんスね？」

「ああ、彼は個性の都合上、個性を使うことが出来なかった。親が個性を使うことに反対してね。今は押さえ込んできた個性が暴走をしているだけなんだ」

「……暴走ツスか？」

「血液が流れると弾丸を発射するのさ。本人の意思に関係無くな。本人も拘置所にいるが、君ならば話を聞く必要も無いか」

「了解ツス。それで、二つ目は？」

「ああ、二つ目は簡単だ」

そう言つてリーダーは一冊のクリアファイルを渡してきた。

「裏の君に仕事さ」

クリアファイルの中には政治家、警官、教師といったヴィランでは無い一般人が数十人綴じられていた。

「表沙汰には出来ない悪行を行った者達だ。いつもの様に頼むよ」

「……了解、リーダー」

「先ず、『ガンタガン』の方を片付けてくれ。ずっと拘置所に居るのは可哀想だ。……すまないな、忍上」

リーダーの言葉を耳に入れながら窓を開ける。窓から飛び出し、夜の街へと繰り出す。

まず集めるは『ガンタガン』の情報。暴走、という事は彼にとって望んでいないもの。それならば、早く助けてあげなくてはいけない。誰かが手を伸ばすならば、何がなんでもその手を取り引き上げる。それがTRPGプレイヤーであり、ヒーローというものだ。

「……個性の暴走が起こったのはつい数日前。高校で指を切った時か。威力はほとんど無く、水鉄砲程度。暴走前に何度も流血を伴う怪我をしているというのに、なぜこの時だけ……。しかも、拘置所にいる間も何度か怪我をしているのに暴走は起こっていない？」

『ガンタガン』の資料を読み、思考を廻す。

「原因は学校？それとも、私生活か？……情報が少なすぎる。とりあえず彼の学校は……あそこツスか」

意識を切り替え、口調を直しながら彼の通っていた学校へと飛び降りる。

夜のためほとんど人はおらず、数人の存在を感じるのみだった。

「これなら、やりやすいツスカね……」

『調査術』による『情報判定』。忍法『内偵』により『ガンタガン』に関する情報が手に入る。

「なるほど、いじめツスカ。……教師は何をしてた？」

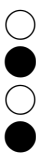
職員室へ向かい、もう一度『情報判定』を行う。

「……そういうことか。リーダーめ、だからもう一つの仕事を頼んだわけか」

『ガンタガン』の調査を切り上げ、もう一つの仕事へ向かう。

「まずは、コイツだな……」

ファイルを開き、ある人物の資料を読む。その者が行った悪行を知るために。その者によって亡くなった者たちの為に。



「ま、待て！一体どこから入った!？」

一人の男が腰を抜かしながら侵入者へそう言った。

彼は尾詩翼^{おしよく}。何かしらの欠陥を抱え、一般的な人間と共に学校へ行けない子供へ勉強を教えている先生だ。しかし数日前、彼の持つクラスの生徒が一人個性を暴走させてしまい、拘置所に入れられた。彼はその事に心を痛めていた。

そんな彼の前に、ビジネススーツを着、ピエロの仮面を付けた何者かが立っていた。

「も、目的はなんだ！金か!？」

「……金、デハナイ」

目の前のピエロ仮面が口を開いた。ボイスチェンジャーを使っているのか、声で個人を特定するのは難しいだろう。

「ならばなんだ！自分で言うのもあれだがウチは金以外に何も無いぞ!!」

『ガンタガン』を、知ッテいるナ」

「え、あ、ああ。うちの生徒の一人だ。個性の暴走で拘置所にいるのを

思うと心が痛いよ」

ピエロ仮面に、恐怖を押しやりながら笑顔を作りそう答えた。彼のクラスには親に捨てられ、名前すら存在しない子供もいた。だから、彼は子供一人一人に名前を与えた。コードネームのような、このクラスでのみ通じる名前だった。『ガンタガン』も、彼がクラスの生徒へ与えた名前だった。

「どの口が言ウカ。暴走させタのは才前だロウ」

ピエロ仮面の言葉に、尾詩は先程まで浮かべていた笑顔を消した。

「……どうしてそれを」

「お前ニは理解し得ヌ方法だ」

「へえ。まあいい。それで、その事を分かっているキミは何をしに来たのかな？」

「……一つ、問ウことガアル」

「何かな。突き止めた褒美として、私に答えられることならなんでも答えよう」

立ち上がり、ニヤニヤと笑いながら自信満々に尾詩はそう言った。

ピエロ仮面は一度呼吸をしてから仮面を外し、一つの疑問を投げかけた。

「なぜ、暴走させた」

聞こえたその声はボイスチェンジャーの付いた仮面を外した事により、尾詩への怒りがひしひしと伝わるものになっていた。

「何故？それは……彼のためさー！」

両手を広げ、高らかに笑いながら尾詩は答える。

「彼は家の都合で個性を使えなかつたらしいからね！私が彼の個性を目覚めさせたのさー！あんな強個性、使わない方が損という奴だよ!!」

「そのためなら、クラスメイトには犠牲になっても良いと？」

「当たり前だろう？一人の英雄を作るには数多の犠牲が付き物さ。それは、神話において証言されている。かの騎士王アーサーはおのが国を守るために侵略者を殺し続けた。現代においても彼は英雄として語り継がれている!!ああそうさ。私が英雄を作るんだ！私が、現代の『英雄教室』を作るのだ！」

『英雄教室』。それは、個性法が存在しなかった個性第一世代に起きた事件。日々増えていくヴィランへ対抗するため、己の出世のため、穢れた大人が行った、個性を持った子供たちによる『人間蠱毒』だ。

『英雄教室』……だと?」

『ガンタガン』は記念すべき十人目だ。だがまだ個性が上手く扱えていないみたいで、威力が水鉄砲程度しかなかったのには驚いたよ。先生としてしっかり導いてやらないと行けないよなあ」

壊れたように、尾詩は笑う。

「……そうか。それならば、遠慮する必要も無い。せめて一撃で葬ってやる」

「私を殺すのかあ? やってみるといい。だが、私の個性に勝てるかなあ?? ひやひやひやひやひやひや!!」

ピエロ仮面は腰につけていた刀を抜き、構える。

尾詩も個性を発動するため、自身の瞳にピエロ仮面を納める。

「個性発動! 暴走して自爆しなあ!!」

尾詩の右目が薄く輝く。

「っ!? な、なんで個性が発動しない……!?!」

「奥義『背教者の一刀』」

凶刃が、尾詩を襲う。たった一刀で尾詩 翼という人間の生命を奪ったその一撃は、普通の人間には勿論のこと、強化個性を持ったヒーローにすら放てない物であった。

「生憎と、自分たちの能力は個性じゃないんすよ。……ま、もう聞こえてないツスカ」

刀の血を振り取り、鞘に収めたピエロ仮面は何事も無かったかのようにならぬまま立ち去った。



「はいどうもー。捜査が難航している警察の皆さんに情報屋の忍上さんツスよー」

太陽がちやうど天高く登った頃、3階の窓を開けながら忍上が会議

室へと入ってきた。

「これ、『ガンタガン』の個性を暴走させた犯人の資料ツス。犯人の名前は尾詩翼。個性は『暴走』。瞳に収めた者の個性を強制的に発動させる個性ツスね。右目の輝きによって暴走度が変わるんで、確保する時は個性を持たない無個性の警官を使うといいツスよ。じゃあ、自分には次の仕事があるんで失礼するツス」

「……嵐、だったね」

まくし立てるような忍上の言葉に、終始ポカーンとしていた警官たちの心を、一人の警官が代表して呟いた。

TRPGプレイヤーは探偵になりて

ハアイ、初めまして。アタシは『COC』こと、九頭龍 菜瑠よ。今は請け負った仕事をしてるの。

「見つけたわよ……」

チャンスは一度きり。コレを逃すと目標は警戒してしまうだろう。目標捕捉………今よッ!?

『ニャー！ー!!』

「もう離さないわよミーちゃん！観念なさい!!」

住宅地の中にある公園に、猫とアタシの声が響く。遊んでいる子供たちとその親はいつもの事かと小さく笑っていた。

「ミーちゃん！こんな場所にいたのねええ!!」

「この辺りは猫の集会所になってるんです。もしまた迷子になった時はカリカリをもってここに来るといいかもしれません」

「ありがとねえ、探偵さん。これ、依頼料です。少ないですがお受け取りください」

「はい。ご依頼の『迷子猫捜索』これにて完了しました。何かありましたら、九頭龍探偵事務所へご連絡を」

依頼人からお金を受け取り、事務所へ戻る。

アタシの九頭龍探偵事務所は『TRPG』の1階に存在する。そもそも『TRPG』は三階建て+地下2階の

計5階建てであり、1階を九頭龍探偵事務所、2階が『TRPG』、3階はアタシのを除いた各自の自室、地下は能力実験場になっている。

九頭龍探偵事務所は1階に存在するため、『TRPG』へのお客様の受付もしていたりする。

「あら、いらっしやい。探偵事務所と『TRPG』、どちらに御用？」探偵事務所に戻ると、1人の少女が備え付けの長椅子に座っていた。

ピンクの髪と薄い青の猫目を持った可愛らしい、制服を着た少女だった。

「用があるのは、探偵事務所だよ」

「そう、なら待たせちゃったわね」

「別に。この人に入れてもらえたから」

空っぽになった湯のみへ麦茶を注ぎながら彼女はそう答える。

アタシも冷蔵庫からりんごジュースとお茶請け代わりにマカロンを取り出す。

「どうぞ。麦茶には合わないけど」

「どうも」

「それで、なんの用かしら。迷子の猫捜索から浮気調査まで、なんでもやるわよ?」

パツと見高校生か中学生の彼女に浮気調査を提案するなんておかしい事ではあるが、見た目が幼女の実年齢億超えヒーローとかが存在しているこの個性社会だ。見た目なんて年齢の判断基準にはなり得ない。

「……私を、殺して」

絞り出したように、彼女が放ったその言葉に先程まで浮かべていた笑顔がスッと引つ込む。

「アンタ、本気でそれ言ってるの?」

「本気も本気。隠し続けて生きるのに疲れたの」

この世界に来てから何度も見た、『生きることを諦めた目』を彼女はしていた。

「訳アリって事ね。……それにしても」

「何?」

「アンタのその顔、何処かで見たことあるのよねえ……」

喉元まで来ているのだが、どうしても答えが出てこない。転生後から取るようにしたメモを見ても、彼女のような容姿をした女性と出会ったことは書いてない。

「街の「あああ!!」中……どうしたの」

思い出した。確かに彼女を見た覚えはある。確かにメモ帳には書かれていないはずだ。なんせ、メモ帳を取る習慣が付く前に見たのだから。それは今世ではない。アタシがここに来る前の、前世の事だ。

確か、彼女は――

「――恋するドラゴン?」

「ッ!」

思わず口から漏れたその言葉に、彼女は驚愕を浮かべた。

「ああ、ゴメンなさいね。いきなり「知ってるの?」……何がよ」

「私の容姿、私の正体、私の……秘密を」

「……アンタの秘密は分からないけど、容姿と正体は知ってるわよ」

何せ、前世の自分の性癖を人外女性好きへ変えたバイブルの1つなのだから。

逆に言ってしまうえば、バイブルを忘れるほどアタシは今世を我武者羅に生き続けたのだらう。狂気に理性を飲まれながらも、抗い、今日その日を生きるために。

「公式であるニトロプラスからの名称は『恋するドラゴン』。その正体は一体の竜。恋人と愛し合うために生きる。そんな存在よね。ま、アンタからしたら訳分からないことだろうけど」

「大丈夫、分かるよ。この容姿は、私が望んだことだから。ニトロプラスだって、竜✦恋だって、私は知ってる」

彼女のその言葉に衝撃を受ける。

この世界において、ニトロプラスは確かに存在している。恋するドラゴンだって存在する。しかし、それはニトロロワイヤルにおけるオリジナルキャラクターとしてであり、竜✦恋は存在しない。

それなのに、彼女は 竜✦恋を知っていた。

この世界に存在しないはずのゲームを知っていた。

「……もしかして探偵さんも?」

「……前世持ちであることを、転生者であることを隠し続けたってわけね。安心なさい。ここにいる人は皆、アンタと同じよ」

救いにはならないかもしれない。死ぬことを諦めないかもしれない。それでも、アンタは1人じゃない。そう、伝えたかった。

「……できれば、もう少し早く知りたかったなあ」

「止める気は、無いのね」

「うん。ここにいる誰か以外と関わることはある。その時にまた隠さ

ないといけない。私はもうやりたくないの」

「そう、なら止めないわ。……じゃあ料金の話をしようかしら」

アタシがそう言うのと、彼女は鳩が豆鉄砲をくらったような顔をしてアタシを見た。

「受けて……くれるの？」

「ここにいる人間は誰だって何度かそう思ったことがあるの。言っちゃえば、アンタはアタシ達のIF。思うところがあるのよ」

生まれた時から『神話生物』という狂気に侵され続けたアタシも、リーダーに会うことが無ければこのようになっていたかもしれない。

悠久を生きる。それは神格を宿したアタシも、レネゲイドビーングのリーダーも、ホムンクルスの身体を持つリヤナも、妖魔の遺伝子を持つ忍上も変わらない。

『TRPG』なんて、同じ境遇不の存在老が集まった傷を舐め合うだけの、死ぬことが怖い臆病者達のコミュニティだ。

「そう。……それで、依頼料はいくら？」

「アンタが決めなさい」

せっかく作り直した真面目な顔がアタシの言葉でまた崩れた。

「え？」

「アンタにとって、その依頼ほどの程度お金をかけるべきモノなのか。安ければその程度。高ければそれだけ真剣ということよ」

例としてだけど、迷子の猫探しは大体5千から1万の間くらいね。

そんな事を言いながら、カラーボックスに入れた引き出しの中から真っ白の領収書とボールペンを彼女に渡した。

驚いてはいたが、彼女は直ぐに意識を切り替えてペンを取った。

「……どうぞ、こちらが依頼料です」

「100万……ね。分かったわ。あなたの覚悟であるこの領収書と共に、その依頼お受けしましょう」

彼女から領収書を受け取る。竜たつ 恋れんという名前がサインとして書かれていた。

そのまんまの名前ねえ。

「ありがとうございます」

依頼成立の証として、彼女と握手をする。

「貴方を殺すとしたら、やっぱり『英雄殿』かしら？」

早速、彼女を殺すための打ち合わせを始める。

『英雄殿』。竜⁺恋にて現代兵器では傷一つ付かなかった恋するドラゴンへダメージを与えた竜殺し。恋するドラゴン 竜 を殺すための舞台装置。

「そう……なのかな。産まれてから、1度も会えてないんだよね。私は『恋するドラゴン』をそのまま自分に当て嵌めた。なのに『英雄殿』は私の前に現れない。コレってもしかして『英雄殿』、存在してないんじゃない？」

「……少し見て欲しいものがあるの」

探偵事務所のある棚の中、そこにある1冊のファイルを取り出し彼女へ見せた。

「これは？」

「ある殺人事件をまとめたスクラップファイルよ」

リーダーがこの事務所を立ち上げた頃から起こっている殺人事件。ここ数年は犯人の影がなかったために忘れていたが、彼女の存在……いや、正体により思い出した。

「殺害されたのは10人以上。性別や年齢、国籍も関係なく殺されているの。殺された全員が個性持ちだった為に、無個性による逆恨みとして処理されたわ。被害者にはある共通点があったことも気付かずにね」

「共通点？」

「個性が竜への肉体変化だったことよ」

しかも現場付近では謎の光が被害者を傷つけていくことを目撃している。

「確実に『英雄殿』は存在している。けども、アンタの元へ現れない。だったら『英雄殿』が現れる条件でも探しましょう？」

「……うん。『英雄殿』がいることだけでも分かったから、私にとっては収穫だもん」

原作において、『英雄殿』は恋するドラゴンが現れるとすぐ殺しに来た。しかし今現在、『英雄殿』は他の竜にご執心のように。

「これは依頼完了までしばらくかかりそうね。連絡が取れるように、携帯の番号教えて貰える？」

「えっ、あ、いや……」

アタシがそう言うと、彼女はそう言っただけで視線を逸らした。

「言いたくない事情でもあるのね。ならいま住んでる住所でいいわ」

彼女はそれも言おうとせず、静かな時が流れた。

流星に彼女の反応に疑問を持ち、どうにか彼女の現状を聞き出した。

「ホームレス!? 年頃の乙女がなしてんのよ! 生活保護でも受け……はあ!?! 戸籍もないの!!?」

空いた口が塞がらないとはこういうことだろう。まさか、親から虐待をされていたとは思わなかった。

「とりあえず、うちに居なさい。住み込みのアルバイトとして雇ってあげるわ」

断る彼女の意見を押し切り、とりあえず風呂に叩き込んだ。川が風呂替わりなのは女としてどうなのかしら。まあ、竜として考えるなら普通……なの？

彼女を風呂に叩き込んで一人になった今、彼女が漏らした言葉から生まれた『英雄殿』に対するひとつの仮説を考えていた。

「彼女と被害者たちの違いはもしかして、戸籍登録?……いえ、どちらかと言えば個性届けかしらね。個性届けから自分が狩るべき対象を探していた? つまり、『英雄殿』は市役所職員? でもこの事件は日本全国で起きてること……」

そもそも、彼女は恋するドラゴンをそのまま自分に当て嵌めた。『英雄殿』はそのオマケとして生まれたのだろうか。それとも、誰かが『英雄殿』になることを望んでこの世界に産まれたのだろうか。この違いが確認できれば……。

終わりのない思考へと意識が向かう。今分かっていることから考えられる予想であるため、『幸運』や『知識』は使えない。アタシの『アイデア』は高くないため、当てにできない。

「……リヤナに竜殺しの逸話でも聞いてみましょう」

ソファから立ち上がり、風呂場の前にバスタオルと着替え（来客用。袋入り）を置いて、リヤナの部屋へと向かった。

その後、風呂から上がった恋もリヤナの部屋に呼んで3人でパジャマパーティー女子会をした。



九頭龍さんに依頼を頼んでから1ヶ月ほどの時間が過ぎた。『英雄殿』の情報は1つもなく、変化があったことは近所のお婆さんに可愛がられるようになった事と、食材の目利きが上手くなったことくらいだ。……そう言えば今日は八百屋さんで安売りがあるらしいから早く行かないと。

「見つからないわねえ、『英雄殿』」

「見つからないね、『英雄殿』」

その日は探偵事務所の仕事を休んで『英雄殿』を探しに街へ来ていた。

「私の方も見つかりませんでした。念話でもみんなそう言ってます」

「悪いわねリヤナ。せっかく休んでたのに」

「ううん。九頭龍さんがこんな時間に時間かける依頼って珍しいから気になってたんです」

浮気調査以外で、ですけどね。そんなことを言ってリヤナは笑う。その笑顔に釣られて私もまた笑顔になる。この1ヶ月でリヤナとすごく仲良くなった。今まで作ることの出来なかった初めての友達だからだろうか。彼女との毎日はとても楽しい。

「今度はこっちを探してみます!」

リヤナはそう言っただけでビル街の方へと向かった。光が歪んでいる所を見るに、英霊たちもついて行ったのだろう。

「なら、アタシたちはこっちを探しましょう?」

九頭龍さんが指さしたのは大通り。リヤナと比べて目が少ない分、他人の目を使う聞きこみ調査だ。

「あら、コンビニね。ちょうどいいわ。アタシ飲み物買ってくるけど、

欲しいものある？」

思いつくようなものは特になく、この場で待っている旨を伝えた。九頭龍さんがコンビニに消え、私は1人駐車場の縁石に腰をかける。

依頼を頼んでから『TRPG』の皆さんと短くも、濃い時間を過ごしてきた。私を否定しない大人に、私をいじめない同年代。そして、私を大切にしてくれる九頭龍さん。正直、この依頼が完了しない事は私は望んでいる。

楽しいのだ。この、なんでもない日々が。明日も今日のように九頭龍さんと仕事をして、夜にはリヤナと寝落ちするまで話をする。今までの私にはなかった、幸せがあこの事務所には確かにあった。

……依頼の取り消しをしよう。そして、正式な社員として雇ってもらえないか、交渉してみよう。私はもう死にたくない。彼らと生きていたい。

コンビニから袋を持って出てくる九頭龍さんが見えた。

「あの、くずつ……」

腹部に違和感を感じた。その後、口へ何かがせり上がり、ソレを外へぶちまけた。

「……ちゅ？」

真つ赤なソレは私の口から吐き出されたものだ。そのまま下へ目線を下げると、光が私の腹部を貫いていた。

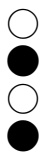
「……は、は。今、来ない、でよ——」

どうにか背後へ視線を向け、私は笑う。1度は死に物狂いで求め、ついさつきそれへの思いを断ち切った私（音）にとっての『死』の象徴。

「——『英雄殿』」

依頼、完了しちやったなあ。

最後に浮かんだ言葉はそんな一言だった。



目の前で起きている出来事に、理解が追いつかない。どうして今に

なつて来たのか。持ち直して来た彼女の前に、何故今現れたのか。

ビニール袋を投げ捨て、急いで彼女に駆け寄る。

「ちよつとー何ボサつとしてるの！救急車と警察を呼んで!!」

アタシの声に通行人たちが動き始めた。一人は110番通報をし、また一人は119番へ電話をかけた。

アタシもやれることは少ないが応急手当を恋にかける。こんなことなら、もつと技能値取つとくんだったわ!

「おい救急車はまだか!早くしねえとあの子死んじまうぞ!」

「渋滞に捕まったらしい!誰かワープ系の個性を持つてるやつはいるか!」

「失礼します!しがな町医者ですが治療系の個性をもっています!延命措置程度なら出来ると思います!!」

騒ぎを聞きつけたのか、一人の男性がやってきた。どうやら医者らしい。アタシは恋を彼に預けた。

「……申し訳、ございませぬ」

恋をみた医者がそう言った。医者はアタシの様子を見てか、それ以上は何も言わなかった。アタシたちの雰囲気から察したのか、この場から離れていった。アタシが恋の死体の前でただ何もしようとせず座っていると、一人の男性が恋の顔へ布を被せた。

「現場にいなかった私に何を言われても意味がないと思う。だが、これだけは言わせてくれ。犯人は私が絶対に捕まえよう。キミとこの子に誓う」

「その必要はない、オールマイト」

聞き覚えのある声に、アタシは顔を上げた。

「……リーダー」

「龍本さん。それはどういうことですか?」

「その少女、童 恋を殺した犯人はキミのようなヒーローではなく、我々『TRPG』の管轄だ。キミの立ち入る隙は無い」

リーダーが腰を落とし、アタシに視線を合わせながら口を開く。

「あの『英雄殿』は我々と同存在だ。だが、奴は人を殺しすぎた。だから私が来た。仕事内容は言わなくても分かるな?任せたぞ」

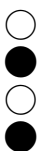
『ディメンジョンゲート』を展開し、リーダーは消える。それと同時に、スマホへ通知が入る。送り主はリヤナで、内容は『英雄殿』の現在地だった。

「……オールマイト、気を使ってくれてありがとね」

彼の返答を待たず、アタシは『英雄殿』の元へ向かう。仕事とは、『英雄殿』を殺すことだ。

数多の人間がこの世界へ転生者として渡る。アタシ達はその中でも『やり過ぎてしまった』存在を消している。もちろん、『TRPG』のメンバーは皆この事がヴィランと同じ……いや、それ以上の悪事だということとは分かっている。それでも、リーダーは止まらないだろう。

ならばアタシ達もリーダーに着いていくのみ。呪い正義のように生きて、祝い悪のように死ぬだけだ。



ヴィランの巣窟でもある寂れたビル街のど真ん中、そこに『英雄殿』はいた。

「こんにちは、ヤな天気ね」

「こんにちは。……そうだな、嫌な天気だ」

「前座はいるかしら？」

「要らん。竜殺機関に従い、邪魔者は消す」

『英雄殿』は黒き甲冑を身に纏う。

彼が人間で良かった。竜†恋における竜殺しは肉体の損傷を修復する。そのためアタシの武道キックは無意味だろう。しかし、意識ある人間ならば――

「ゲームエリア直径1kmに設定」

――恐怖からは逃れられないはずだ。

「さよなら、設定に忠実な竜殺し。この世界で貴方は『英雄』になり得ない」

アタシの手に現れた一冊の本。それはこの世界の住人には馴染み

のないもの。しかし、アタシたちと同じ世界出身ならとても馴染みあるもの。

「KP権限により、かの邪神をこの場に呼び出す」

『TRPG』が持つ秘技にして、絶対に使っては行けない邪奥義。

「いでよクトウルフ。己を英雄と勘違いする愚か者の精神を粉碎しろ」

自身をGMとして、指定した範囲内にTRPGの常識を無理矢理押し付ける。

ああ、なんとも恐ろしき技よ。



『本日のニュースです。先日の17時頃に×町の朽ち果てたビル街に屯していたヴィランのほとんどが精神に異常をきたすという怪事件が発生しました。免れた一名のヴィランも恐怖からなのか、言葉を話すことができない状況とのことです。続報が入り次第——』

TRPGプレイヤーはヴィランになりて

サンサンと太陽が大地を照らす中、歓声の上がる場所があった。そこは子供だけでなく大人までもが歓声を上げ、子供に戻る場所。そう、テーマパークだ。

そのテーマパークにて人々の歓声を身体に受けながら手を振る存在がいた。彼は火ノ無^{ひのなし} 灰^{はい}。ここでいわゆる『中の人』をやっている。

「あー、死ぬる……」

パレードが終わり、裏で着ぐるみを脱いだ彼はそう呟いた。

「飛んで跳ねてしてればそうなるっしょ火ノちゃん」

自業自得ね。火ノ無の言葉に、先輩アルバイターが的確なツツコミを入れた。

「子供たちが笑顔になるんでしたら自重はしませんよ、先輩」

「いや確かに火ノちゃんのパフォーマンスはお客様アンケートでも高評価だけども、それでキミが倒れられても困る訳よ」

キミのように動ける人ってあんま居ないからねえ、いやマジで。最後に本心を暴露する先輩アルバイター。この隠さない態度が火ノ無や他のアルバイターにも好まれており、慕う後輩アルバイターたちが多い。

「オレ以上に動ける先輩が何を言いますか」

「おう、そんなに私の腰を殺したいか」

確かに、先輩アルバイターは火ノ無よりも動ける優秀な人材だ。しかし、たった一度のパレードを大成功させるために自身の腰を生贄にするほどのガチ勢でもなかった。

「まあ、定期的に休みは入れなさいな。家の手伝いもあって休めてないんでしょ？」

「あー、はい。そうです……ね」

「今日はもう終わりだし、ゆっくりしなよー。……ナイトパレードはオタ芸集団が来るから腰は——」

オタ芸集団によるナイトパレードというとてつもなく気になるワードを聴きながらも、火ノ無は着替えを済ませ、自宅へと向かう

……前に頼まれていた買い物のため、スーパーへ寄った。買う物は納豆1つだけだったため、買い物自体は数分で終了した。

さっさと帰ろうか。そう思いながらスーパーから出た瞬間、ポケットに入れていたスマホがメッセージの受信を知らせた。

メッセージは家主からであり、中身はこうだ。

『From:ごっちゃん』

To:火ノ無

件名:本日の『お手伝い』について

・夜の10:00。倉庫街』

シンプルすぎるメッセージに火ノ無は反応すること無く、了解とのメッセージを送り返した。言わば慣れたのだ。

彼が居候する家の持ち主こと『ごっちゃん』は結構ぎつくりした性格であり、連絡も必要最低限である。朝、バイトに出かける前の火ノ無へ「納豆」の一言を送っただけな事を考えればもう……うん。

「これは……休めないかな?」

バイトの先輩からは休むように言われたが、家主からの言葉には逆らえない。ホームレスやっていた火ノ無でも犬小屋ENDは勘弁したい。人としての尊厳は絞りカス程度だが残ってはいる……と彼は思っているからだ。

「まあ、頑張りますか。【ソウル】さえ確保できればどうにかなるっしょ」

お気楽に彼は家へ向かう。

ちなみに、買った納豆がおかめ納豆ではなく、くめ納豆だったがために火ノ無は数メートル吹き飛んだ。

……
……
……

時間は残酷にも過ぎていき、夜の十時倉庫街。倉庫の屋根に二つの人影があった。

「準備はいいか、『地獄姫P』」

1人は全身を黒い鎧に包んでおり、その手にはロングソードと盾。彼はヴィラン『黒騎士』。火ノ無のヴィランモードである。

『御託はいい。さっさと終わらせて瞳を閉じさせろ』

『黒騎士』の言葉に、『地獄姫P』と呼ばれた少女はプラカードを提示して返事を返した。

彼女は火ノ無 ヘル。灰の妹であり、彼の生命線とも言える存在である。ヴィラン名は『地獄姫P』。『黒騎士』の活躍をカメラに余すところなく収めている変態である。しかもハアハア息を荒げ、興奮した様子で行うため救いようがない。そんな様子から姫の前に地獄なんて枕言葉が付いた。

Pは「まるで、アイドルとプロデューサーだ」と1人のヒーローが口走った結果付いたものである。そんな2人は一部のヒーロー本からセットで『黒騎士』なんて呼ばれているが、ソレは彼らのあずかり知らぬ所。知らぬが仏である。

「火防女……だっけ？視力がないのは」

『YES。しかし今の私はプロデューサーだ。目が見えなきや話にならない』

「ならサクッと終わらせますか」

『地獄姫P』が肩に乗るのを確認すると、『黒騎士』は屋根から屋根へと飛んでいく。向かう先はターゲットの元。『ごっさん』曰く、この時間はいつも火薬庫周辺に居るようだが……。

「見つけた。やっぱり火薬庫か」

静かに眠る竜印の指輪を身につけ、足音……と言うよりも存在感を薄くした『黒騎士』が火薬庫の上に降り立つ。火薬庫のみ電気がついており、人がいると示している。

『火炎瓶投げる？それとも爆破？』

「なんで爆撃しか手がないんですかねえ……」

爆発って、映えるじゃん？と彼女の持つプラカードに答えが書かれる。

ちなみに彼女がプラカードで会話するのは、自身の声を入れない為らしい。プロデューサーが番組出演は邪道と言う謎の信念があるよ

うだ。

「でも確殺出来るとはかぎらないから、上から飛び掛る」

『落下致命は正義。ハッキリわかんかね』

「時々お前がなんのネタを使ってるのか、お兄ちゃんマジで分かんないんだけど」

そんな風にじやれていると、火薬庫の電気が消える。

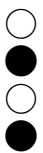
それを合図に『黒騎士』は武器を構え、『地獄姫P』はカメラを構えた。先程までの空気は消え、そこには兄妹ではなく2人のヴィランが存在していた。

扉が開かれ、一人の男が現れた。その男はいつも以上に青く光る月をふと見上げた。それが彼の見た最期の光景だった。

「依頼、完了」

『(☒)ω(☒)∠』』

「……おやすみ、かな？ま、家に帰ろう。ごっさんも待つてるだろうし」



「おかえり、火ノ無兄妹。メシはテーブルの上な」

お兄ちゃんと家に帰ると、護国ノさんがソファで横になりながらそんな事を言った。

「ただいま、ごっさん。カップラーメンはご飯じゃないと言いたいたいんだけど」

「用意してるだけ有難く思え灰。お湯はポットの中だ。コッチはガキのご機嫌取りで疲れてんだよ」

護国ノさんはそう言ってスマホを弄り始めた。ガキというのは、恐らく死柄木の事だろう。敵連合に所属しているわたし達3人だが、『黒騎士』ことお兄ちゃんと『地獄姫P』ことわたしは1度も顔を出したことがない。わたし達兄妹は護国ノさんの部下みたいな立ち位置らしいからとのことだ。

「あ、ヘル。お前は寝る前に少し残れ。話がある」

カップラーメン(醤油味)を食べお兄ちゃんが布団に向かった後、護国ノさんがその声をかけてきた。

「分かりました」

「悪いな、もう夜遅いつてのに」

「いえ、お兄ちゃんには通じない話だと思いますので。仕方ないことですよ」

「灰はまあ、この世界の人間だしな」

護国ノさんの言う通り、お兄ちゃんはこの世界生まれ、この世界育ちの純粋なヒロアカ住人だ。わたしや護国ノさんはいわゆる転生者と言うやつである。恐らく、ヒーロー事務所『TRPG』もそうなのだろう。というか、そうじゃ無かったら驚く。

「死柄木にも言われんだが、前々から目をつけてた竜 恋って奴いたろ?」

「この前亡くなった人ですね」

「そう、ソイツ。殺されたせいで戦力強化が出来ないとか愚痴ってよ」
つい二週間前ほどにニュースに流れていた殺人事件。被害者はわたし達がこちら側に引き込もうもしていた(恐らく同類の)竜 恋。名前からして能力は竜+恋の再現だろうか。

「まあ、いいのでは?ヒーローに会って良かったですから。このまま接触して情報を漏らされるよりはマシだと思います」

「あー、いや、うん。そうなんだがよ。生憎とスポンサー様は納得してないみたいでな。竜になる能力があれば視覚的な強さは確保出来たと考えてたみたいだからな」

……それを言われると弱い。人は取得する情報のほとんどを視覚に頼っているらしい為、見て圧倒できるナニカがあれば次の作戦でもラクにはなつたろう。

「本来は次の作戦に脳無と一緒に使う予定だったらしい。だがまあ、それが出来なくなったからな。個人的には死柄木の悔しい顔を見れてメシウマではあるが、代わりにオレが出ることになった。正直とても面倒い」

護国ノさんと死柄木はとても仲が悪い。出会うとどこでも喧嘩を

する程にだ。ただ、心のどこかで認めあっているみたいなのか分らないが、2人は喧嘩じゃ絶対個性は使わない。どちらも笑いなから殴り合うのだ。……文字に起こすとやばい事してるなあ。

『個』が使えないなら、『群』を使うだけだ。死柄木も、元々オレの代わりとしてその竜を用意するつもりだったらしい。……さて、雑談はここまでだ。本題に入るぞ」

「本題……ですか？」

「ああ。今度の雄英高校襲撃作戦にお前ら兄妹も参加してもらおう」

今度と言ってもまだまだ先だけだな。と護国ノさんは笑う。

雄英高校襲撃作戦は原作における重要な場面だ。主人公が遠い存在であったヴィランを認識し、その恐怖を味わう。死柄木弔という己の敵と対峙する。そんな場面だ。

「なんでですか？」

「……始まりのヒーローが新任教師として赴任していることが分かった」

始まりのヒーロー。

それはこの世界に『ヒーロー』という新たな職業と個性法を持ち込んだ存在であり、おそらく私たちと同じ存在。ヒーローとは異なる、国からある一定以上の罪を犯したヴィランを裁く処刑人としての許可を得、処刑人が集まるヒーロー事務所を唯一建てることの出来る存在。

『ダブルクロス』龍本 都築が、ですか？」

「ああ。雄英高校の制服をきたガキに背負われてる姿が拡散されてたのを見たってウチの奴が言ってる。オレも確認したがマジだった。とりあえず、ネタ提供の意味で『ダブルクロス』のクソともう1人のガキにそつと感謝はしておいた」

……敵ながら龍本 都築とその雄英生に合唱。おそらく護国ノさんの次回作はその2人によるR-18百合物になるだろう。または強姦系？

「しかもガキの方は銀髪赤目ロリ巨乳という属性ガン盛りだからな。シリーズにすれば売れるぞコレ」

雄英生には同じ女として同情を禁じ得ない。

気付いたら自分がR―18同人誌の題材にされてる。それなんて精神攻撃？

とりあえず閑話休題。

「んで、本題の続きはまだですか？」

「ん、ああ悪い。トリップしてた。んでまあ、『ダブルクロス』相手だと脳無じゃ勝てないんだ。指示待ちの間に捕縛されて終わりになるからな。そのためのお前らだ。お前らの仕事は『ダブルクロス』の足止め。勝つ必要はない。だからといって負けるな。引き分けにしろ。それがクライアントからのオーダーだ」

「オーダーは理解しました。ですがその雄英生はどうするのですか？ 龍本 都築を背負っているという事は彼女も『TRPG』の一員なのだと思いますが」

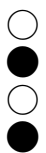
「そつちに関してには心配すんな。あの顔、髪の色、目の色から察するにありやあ『天の杯』だ。本体さえ捕らえちまえば問題ない」

話は終わりののか、護国ノさんはそれ以降黙ってスマホをいじり始めてしまった。こちらから話しかけても返事は上の空であり、話しかけるだけ無駄だろう。

ならば、本日のお兄ちゃんの活躍を録画したビデオの編集でもして寝よう。

「おやすみなさい、護国ノさん」

返事は無かった。まあ、いつもの事です。



「おやすみなさい、護国ノさん」

ヘルの挨拶に、オレは返事を返せなかった。

と、言うのもヘルとの会話中に上がってきた報告に掛かり切っていたからだ。

周囲に敵を確認したらしい。彼らの姿は見たことも聞いた事もないため、どれも駆け出しヒーローだろう。

スマホにみせかけた端末を用いて彼女たちを戻らせる。この端末には決まった言葉を組み合わせて送ることしか出来ない。映像も無音声なため、詳しい話を聞く必要がある。

「今戻ったでー」

部屋の扉が開き1人の少女が入ってきた。何処がとは言わないが、かなりまな板である。

「お疲れ。んで、現状は？」

「多いだけで、殆どが無名みたいやなあ。ほつといても問題はないと思うで？邪魔なら、ウチが片付けてもええんやけど」

「お前らの顔出しは今度の雄英高校襲撃作戦だ。それまではヒーローに顔を覚えられる訳にはいかん」

護国ノの言葉を聞き、少女は小さく笑う。

「ウチらはキミの部下。キミが使ってくれるから存在してられる。だからキミの言うことに逆らう気は無いけど、無理はしちやいけんよ？」

キミも女の子なんだから。彼女はそう言つて姿を消した。少女の立っていた場所から1枚の紙が現れ、カサという音を立てて床へ落ちた。

「分かってるよ、そんなことは」

その紙を拾い上げ、スマホ型の操作端末に近付ける。すると、紙は端末の中へ吸い込まれていく。

収納ができたことを確認して、護国ノはずっと座っていたため凝り固まってしまった身体をほぐすように伸びをした。

「さて、鬼の住処を荒そうとする不届き者には罰を与えないとな」

護国ノはファイルから1枚の紙を取り出し、自身の中へと吸い込ませ、ベキベキと音を立てて彼女の姿が変化していく。

170はあろうと思われた身長は子供程度へと縮み、肌は文字通りの真っ白になり、部屋着代わりに着ていた芋ジャージは大胆に胸からへそにかけてを露出した黒いコートのようなモノへと変化した（もちろん、水着のようなもので胸は隠れている）。

何処かから現れたりユックサックのようなものを背負うその姿は

まるで小学生だろう。

左目からは青い光を放ち、尻の辺りからはまるで尻尾のような機械の化け物が生まれた。

「サテ、じゃあ行こうかクゾオレ私」

航空戦、雷撃戦、砲撃戦と、すべての艦隊戦闘を担う超弩級重雷装航空巡洋戦艦が夜の世界へと降り立った。

彼女の能力は『艦これTRPG』。

艦娘へと変身し、艦装を担うだけだった能力は彼女の個性と競合し、1つのバケモノを生み出した。

その個性は『鬼化』。艦隊これくしょんにおける敵にして、艦娘の裏とも言える深海棲艦へと姿を変化させる。